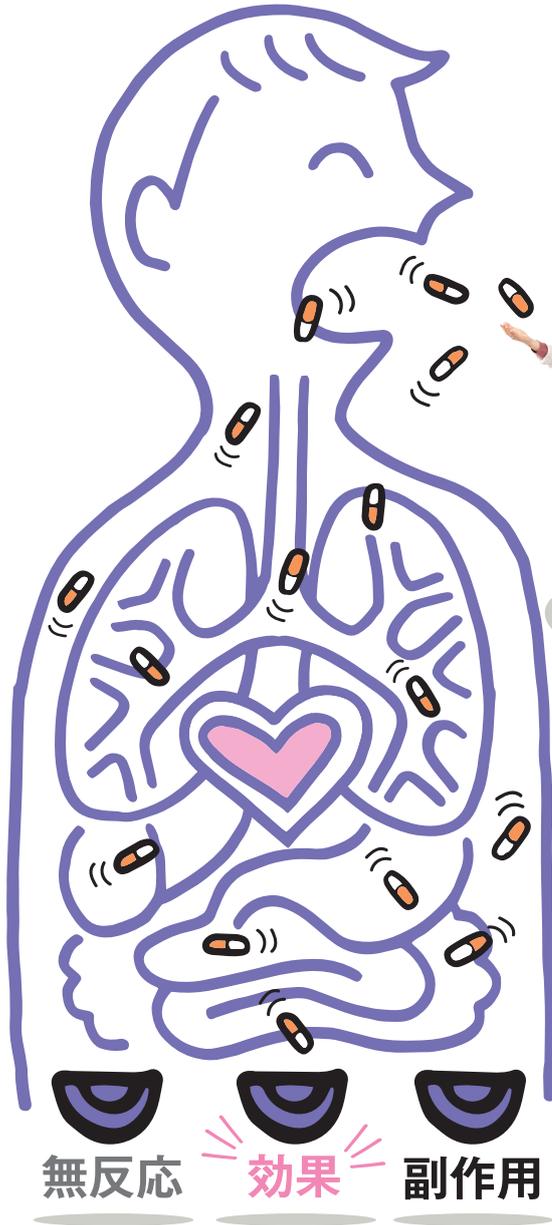


Q.

「くすり」は「リスク」って、ホント？



体内に入った薬が正しく作用すれば、薬の服用は確実に生活の質を上げてくれます。



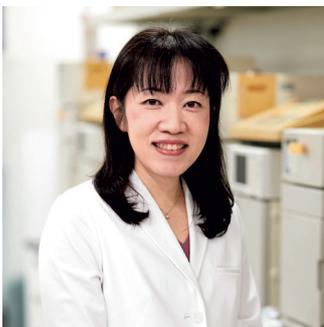
からだの中での“薬の運命”を探ってみる。

病気の治療方法として、薬物療法は重要な地位を占めます。病院に行けばほとんどの場合、薬を処方されますよね。ではその「くすり」はからだの中に入った後、どのような運命をたどるのでしょうか。薬が効いたり効かなかったり、あるいは副作用が出たりといった、体内での薬の運命から薬効や副作用の個体差を明らかにするのが私たちの研究テーマです。薬の生体内運命は、病状や併用薬でも変わりますし、遺伝的要因によっても変わります。そうした薬の生体内運命を予測することで、適切な薬物治療を推進していくことを目指して、日夜研究を繰り返しています。



薬学動態学という研究分野を通して、よりよい医療につながる情報を提供する。

薬は使い方によっては毒にもなります。「くすり」は「リスク」と言われるのも、そうしたところからでしょう。しかし、薬の服用によって確実にQOL(Quality of Life / 生活の質)が向上した経験は誰にでもあると思います。たくさんある薬の中から、適切な薬を使用することは、間違いなくよりよい医療へとつながっていきます。私が専門としている薬学動態学(くすりの生体内運命)は、研究分野としては薬学部以外に存在しません。そのためにも、医療につながる情報を提供することこそ私たちの研究の使命であるとともに、“くすりの専門家”として、薬学独自の見地から医療に貢献していきたいと思っています。



加藤 美紀 先生

PROFILE

高校生の頃、抗がん剤と帯状疱疹治療薬を併用したことで死者が出たというニュースを見て、この研究分野に興味を持ったという加藤先生。本来、病気を治すはずの薬を飲んで、人が亡くなってはいけないと切実に感じたそうです。モットーは「真実はなにか」。枝葉を見るのではなく、幹を見られるようにスタンスを定めているとのこと。

学生時代のマイブーム

研究の息抜きはみんなでレイトショー。



大きさに言えば“研究室が我が家”のような生活でした。本当に毎日、それぞれが自分の研究に熟中していましたね。そして疲れてきたら、みんなで集って、ディカプリオやブラッド・ピットの映画をよく観に行っていました。